（研究論文）

幼稚園における教職員の役割（Ⅰ）

平尾　達夫

On the Role of Teachers and Clerical Staff in a Kindergarten（1）

Tatuo Hirao

要約

幼稚園教職員は、教育現場で子どもたちを前にして指導していくにあたり、知っておくべきこと、心得ておくべきことなどを、幼児期の教育の本質的なことから、教育に付随する諸々の現場活動まで、事前に研修しておくことが望まれる。

ここでは、幼児期の教育の仕事の本質にはじまり、教育の実践例、保護者との連携、健康づくり、事務にいたる具体的な問題点について論じ、教職員の研修内容を試論として提起するものである。とりわけ教育実践については、子どもの集団づくりについての実践経験から、一つの指導法について具体的に詳しく述べている。

この試論は、私が幼稚園に勤務するようになってから今日に至るまでに、教員の指導、研修をより効果的に行うためにはどうすればよいかという課題に応えるためにまとめたものである、長期に亘る理事長・園長としての体験・経験や実績、躓きや失敗について、反省を基にまとめたものである。教職論の教材として使用したいと考えている。

キーワード　：　教師の倫理　　教育愛　　教師集団　　教育実践　　生活点検

2006年8月31日受理（理論）

はじめに

教師とはなにか。一言で言うならば「人の生き方を認めながらも、自分の生き方を示すことによって問題提起し、互いにより高いものに変化させる人」といえるのではないだろうか。それは幼児教育から高等教育に至るすべての段階の教師において、共通のことと思う。この世界では、教師が教えて生徒・学生がそれを習ってそれで終わり、という一方通行では決してない。人と人との生き方の相互作用による変化がなければ、教育はなりたたない。はじめ、教師によって影響を受けた生徒や学生が変化し、その変化した生徒・学生によって教師が変えられる。変えられた教師がさらに次元の高い影響を与える。というように螺旋を描きながら響き合って、互いにより高いものへと進んでいく。それが日々行われている場が、学校であり幼稚園である。このように響き合いができる教師のための条件を、いろいろ考えてみる。

1、幼稚園の教諭をめざす人たちへ

教師は医師や牧師などと同じく、肉体的にも精神的にも「道理をもって人を教え導く人」であり、他の専門職とは一線を画している。幼稚園の教諭もこの教師の重要な位置を占めており、人の一生の幸せを左右する幼児期の三つ子の魂にかかわる、社会的に影響力の大きな責任の重い職業である。

そこで、この仕事を初任者ができるだけつまずきを少なく、しかも早く一人前のプロとして仕事ができるようになるためには、まず経験者の蓄積してきた方法を、無条件で身につけることから始めなければならない。そして、それが身についたとき、初めて自分独自の方法を磨き、新しい分野を開拓する資格ができるといえるのである。いきなり初めから、我流を全面に押し出してがんばってみても、教育にはそれなりの客観的な教育理論、教育方法があり、それを無視すれば混乱を招く場合も少なくない。さらに指導される幼児に

とっても集団生活を乱され、場合によっては危険にさらされるかもしれないからである。

このことは、航空機のパイロットの養成と対比すればよく理解できる。航空機の操縦は人の命を預かっているという点では同じであるが、教師以上に失敗は絶対に許されないというところが際立っている。離陸の仕方、着陸の仕方、旋回の仕方、ありとあらゆる基本的操縦法を無条件で身につけなくてはならない。

初めから自己流は絶対に許されないのである。教育に携わる教師の養成も、パイロットとは同じではないにしても、尊い命を預かっているという共通項がある。まずその施設での教育方法、教育の基本となる指導原理、原則などを、経験者から無条件に学ぶことから始めなければならない。このことは、幼児教育に当たる教師には特に要求されることである。

2、教育という仕事の本質

教育も社会の仕事の一つとして考えられるときは、サービス業の範疇に入る。しかし教育というサービスは、一般の企業や物品製造業が商品を客に販売するのとは同列に考えることはできない。

(1) 教育という仕事

幼児教育は、授業料を受け取って仕事をすることになるが、商店で物を買ったり、ホテルへ泊まるのとは質が違う。ホテルなら快適さ、心地良さが第一の目標であり、直接すぐに品質も自分の目で確かめ、評価できるのである。ところが、教育という仕事は違う。利用者の心地よさばかり、追求するわけにはいかないのである。寒くても外遊びに誘ったり、転んですりむくかもしれない道をがんばって最後まで歩き通すなどの要求をする。一方、利用者である幼児はその仕事の評価ができない上に、その真価は将来になってからでしかわからないという問題をはらんでいる。

教育という仕事では、親も単なる消費者としてではなく、教師とともに子どもの最善の利益を生み出す共同の生産者であるという自覚をもって、この仕事を受けなければならないのである。

(2) 生産者として手をつなぐ

そこで、家庭と園、親と教師は、子どもの最善の利益を追求するパートナーとして気持ちを通い合わせ、時には意見が違っても、互いに成長し合える人間関係を築かなければならない。子育ての真のパートナーシップが必要とされる。親とともに心の底から、「なんとしてもこの子のためには」と、気持ちを込められる信頼関係が生まれなければならない。

「参観は出席したけれど、懇談会はちょっと忙しいので…」などと思う親は決して少なくない。忙しい親たちの気持ちを理解しながらも、励まし合えるパートナーを増やしていくためのコミュニケーションを、ぜひしっかり工夫してほしい。

また、教師も時には失敗するから。そんな時はぜひあたたかい目で見てくれるパートナーであってほしい。日頃の教師の教育に対する取り組み姿勢が積み重なり、響きあって、揺るぎないパートナーシップを築けたとき、大きな信頼の輪ができる。

生産者同士のこのパートナーシップは、お金では決して買えるものではない。教師のプロ意識と親の愛が生み出す、最高の宝だとしかいいようがない。

3、発達そのハードとソフト

「教育の成果は、10年20年経って始めて現れてくる。」というのは真理であろう。ほんとうに良い教育をしても、すぐその結果が見えるとは限らないからである。その子どもが大きく成長し、青年期になって始めて成果が見えてくることの方が多い。

しかし、すぐ見えないので何をして良いか分からない、ということでは決してない。特に幼児期の教育では、学習の成果が目に見えるもの、例えば文字が書けるとか、計算ができるなど、学習の中身＝ソフトの成果と、その中身を受け入れる脳や身体の機能をはじめとする器（うつわ）＝ハードの育ち具合を、区別することが必要である。器がしっかり育っていないところへ、学習を詰め込んでも、かえって能率の上がらない学習になってしまうからである。

(1) 幼児期はあそびの世界

幼児期の教育方法は、幼児を取り巻く物的環境や人的環境を整え、子どものあそび文化を豊かにすることで進めなければならない。好きなあそびに集中することによって、育つ体力や気力は器を強く大きく育てる。また、幼児教育では話し言葉を最も大切にする。読んだり書いたりするよりも、どれだけ豊かに話したり、聞いたりできるかという世界を大きく広げることが先決である。このことはバイリンガルでも同じである。意識的に暗記することや勉強することではなく、あそびや絵本を読んでもらうなかで、繰り返しくりかえし

自然に身に付けることを継続することが大切なのである。したがって、あそべない子は発達に問題を残すことになる。

(2) 発達の事実をつくる

さて、教育の成果のソフト面はすぐには見えないけれど、ハードの方はそうでもない。2年間、3年間の成果は見ることができる。卒園のころには、幼児の運動能力や描画の作品発表を通して、両親や家族の目の前で、子どもの粗大運動能力、微細運動能力、操作能力など、爪の先まで自分の思いの通りに動かせる身体の主人公としての脳の発達の事実を、確かめてもらうことは可能である。

授業をして試験をして「はいあなたは五十点です。次はがんばってください。」でおしまいという評価ではなく（そんな評価なら誰でもできる)、教師にとってはすごく大変だけれど、ただ発達の目標や願いを述べるだけではなく、全員が具体的な目標を達成する指導を心がけ、どの子も笑顔で「ああよくがんばった」「つぎの目標もがんばるぞ」と思えるようになるまで指導することが求められる。

そのためには年次計画、月次計画から毎日の指導計画を練り上げ、幼稚園での指導方法を準備しなくてはならない。さらにその上で、必要ならば親や家庭での協力も求めればよい。家庭での生活の仕方や食も点検してもらい、すべての子どもがすばらしい無限の可能性を秘めたハードを育てて卒園できるように、睡眠や食べ物にも気をつけ、園と家庭でがっちりスクラムを組むことが必要である。

(3) ほめて意欲を引き出す

美しい倒立側転や、鉄棒の逆上がりを、どの子もできるようにして、卒園させることは可能である。健康な子どもであれば、必ずできるようになる。これはなぜだろうか。技術的な指導の蓄積もあるが、それは評価の仕方、つまりほめることによって可能になっているところが大きい。幼児期の子どもをほめることによって、引き出される可能性の大きさについて考えてみよう。

ほめるということは、ただ口先だけでは絶対だめである。一番大切なことは相手を心から信頼し、喜びを共にすることにある。そしてほめる対象については、正確に知っておくことが必要である。なにがどうなのか、どこがすばらしいのかが、正しく把握できていなければならない。このことがいいかげんでは、やがてしらけてくる。そういう意味でほめるということは、たとえ相手が幼児であっても簡単なことではない。子どものやっていることをしっかり見てやること、努力の姿を見守ってやること、が大切である。できれば子どものそのときどきの苦しみや、心の葛藤まで知っておくことである。そしてそれを乗り越えたときに心から喜び、その喜びをしっかりと表現しなければならない。

(4) 短所をとがめない

ほめることの効用は、可能性の問題だけではない。それは長所をほめると、短所が消えるということにつながるからである。短所をしつこく追及するのでなく、長所をほめて大きく喜ぶことの繰り返しのなかで、短所が自然に消えていくのである。もちろん、すぐにはいかないが、この教育作用は非常に有効な教育手段となる。

(5) 時には演出を

「あんなん　ちっとも　ほめるとこあらへん　ほめようないわ」と言われる方もいる。確かに欠点は、長所に比べて見えやすいものである。そして子どもは親の思うようにはならないのが常。しかし、教育の方法は実態把握だけではない。積極的に創造することもまた教育である。今、良いところが無くても、良いところに繋がりそうなところはある。また、基準となるレベルをうーんと低くして、それより良いと考えるのである。そしてほめる。この演出は良い点を引き出す手段、奥の手である。ほんのちょっとしか良くなくても、それを大きく拡大してほめることが、時には必要なのである。ほめられることによって意欲が増し、ぐんぐん良くなっていくからである。私の経験では、卒園のころの側転などの指導は、まさにこの拡大してほめる演出効果でやってきた。膝が曲がっていても「すごくきれいよ」「上手、じょうず」と拍手をしながらほめ続けると、膝が伸びてきて、クラス全員ができるようになる。このことは、対子どもだけではない。ほめることは、大人も子どもも同じである。**「ほめてだめなら　ほめてみな」**ほめ方を工夫して、ほめる以外にはない。

幼児教育の教師になったら、とりわけこの教育作用

を心得ていてほしい。

次に、幼稚園の教師として、親とともに成長しあう姿勢や心得について考えてみよう。

4、教育に携わる者は

（幼稚園教師の倫理の実際）

(1) 謙遜こそ成長の糧

教育に携わるものにとって、大切なものは「情熱」、「徹底」そして「謙遜」である。とかく教師は相手が子どもであることと、担当クラスの責任者・指導者であることを、一国（クラス）の城主であるかのように、傲慢になる危険性をもっている。教師としての人間性が要求されるのである。その人間性を三つの具体的ことばとして表したのが、冒頭の「情熱」、「徹底」、「謙遜」である。特に三つ目の謙遜は大切である。成長するための条件でもあるからである。謙遜の心がない者は、自己満足にも陥りやすく、他者から学ぶという大切なこともできなくなってしまうからである。特に経験年数の多いベテラン担任ともなってくると、指導力もあり、自分一人の力で子どもたちが成長しているような錯覚に陥りやすい。

電車が走るのは、運転手一人の力で走っているのではなく、線路の保全、電力の送電、運行ダイヤや信号機の管理、券売・改札から乗客の乗降など、ありとあらゆる裏方の仕事の支えから成り立っているように、幼稚園も授業料の集金から経理事務、補助金事務、園舎の保全、理事会・評議員会の運営など、表に出ない多くの仕事が背後にあり、これらに支えられて、担任という表の仕事が安心してできるのである。すべての関係者のチームワークがあることを忘れて、慢心しないようにしなければならない。関係者みんなが手をつなぐために、個人的儀礼、金品の贈答廃止、PTAによる集団的慶弔保障もこの意味から重要になってくる。

(2) 挨拶・ことばづかい

父母には自分からまず先に明るい笑顔で声をかけること。相手から先に声をかけられないよう気をつけること。そのためには日頃から誰にでも区別なく、先に挨拶するよう心がけて、実践しておくことが大切である。挨拶はなんでもないように思われるかもしれないが、毎日まいにち積み上がっていくものであるから、大きな影響力をもっている。教師の人間性をより大きく表現するものの一つとなる。一方、保護者の中にも無愛想な人もいる。いつもこちらから挨拶しているのに、それがあたりまえのように思われると、こちらとしても気持ちのいいものではない。しかしそんな人にこそ、反面教師として学ばせてもらうことである。挨拶がいかに大切かよくわかる。

誰でも初めはできるけれど、段々時間が経過してくると忘れてしまったり、麻痺してきたりするものである。そこで大切なことが「継続」である。始めできたことを徹底して続けることである。常に初心に帰る大切さがここにある。

・おはようございます・いってきます・ただいま・おねがいします・ありがとうございます・こんにちは・いつもおせわになります・お母さんが来られました（「きました」は誤）　・○○さんおられますか（「いますか」は誤）・いただきます・ごちそうさま・さようなら・しつれいしますetc.

常に、明るい笑顔で、元気にはつらつとした声で、相手の目を見て挨拶や言葉かけをしなければならない。

ところが一方では、気の合った父母と親しくなり過ぎて、ことば遣いも友達のようになり、電話の応対でも「はい」ではなく「うんうん」など、礼儀を忘れる場合も出てくる。これも父母の目から見ると、先生という人間性が軽薄に見え、信用を喪失する。教師としての指導が入らなくなる。幼稚園の教師である限りは、いくら親しくなっても礼節を忘れてはならない。「親しい中にも礼儀あり」である。父母の態度は教師の姿の反映である。あなたの態度が、相手をどのようにでも変えられるのである。

(3) 時間厳守

父母はある意味ではお客さま。父母が時間を守らないから、こちらもルーズになってあたり前、などというのは教師の発想であってはならない。仕事の出勤時間や、行事の時間、すべて父母と対等ではない。これは民主主義に反すると思うかも知れないが、決してそうではない。権利と義務の次元ではなく、同じ「なかま」に対する思いやりの問題として考えるべきである。つまり相手のルーズさを許し、しかも咎めないで、時間を大切にするという崇高な目標に導いていくという、教育の次元の問題なのである。さらに自らの時間を厳守するという意味から、行動予定の時刻には常に余裕を持って対処しなくてはならない。予定の合図の

チャイムを聞かないと行動しないなど受動的にではなく、積極的かつ主体的に物事を始める事が教師の心得であるべきだ。

(4) 教室は教師を表わす。

教室の出入口に立つと、その担任が疲れているのか、活気に満ちているのかすぐわかる。教室はそれほど担任の人となりをよく語っているものである。一般に、父母からの信頼は、口で話すことよりも物的環境による無言の表現から得られることが多い。いくら口では良い事を言っても、教室が汚く整理整頓もできていなければ、熱意・誠意は感じられない。教室はもちろん子どもの便所などの掃除も、常に行届いていなければならないのである。

同時に、清掃というものはきわめて精神的な面をもっている。掃除をしっかりするということは、手指の動きや一定の肉体労働を必要とするので、大脳をより賦活させるとともに基礎体力のレベルを高め、活動意欲を活性化し、すべての活動をより積極的に行なわせる作用をもっている。従って、掃除がゆきとどいていることは、健康状態も良い証拠。指導の細部にもよく気がついていることでもある。子どもに渡すプリント類や準備した教材の紛失なども防ぐことができる。逆に掃除がいい加減な教師は、教育指導もすべていい加減になる。掃除する姿勢こそ、教師の内面の現象形態といってよいだろう。隅々の掃除にも、心を配ることが求められる。ちなみに、禅の修業で有名な永平寺(開祖＝道元禅師）では、静的な禅修業の合間に物凄い速さでする掃除が入っている。毎日一回、汗をかくほどの勢いで掃除することが、心と身体の健康をつくるのである。この歴史的事実に学ぶことが大切である。

掃除こそ人間形成の基本となる。朝の当番の園庭掃除で、汗をかいてみてほしい。これがつらくて、おっくうならば、あなたの心と体の健康状態は、幼稚園の担任教諭としてのレベルではない。子どもたちと自分自身のために、今すぐ健康な体力を取り戻す必要がある。

(5) 教えるのではなく

子どもに「教えてやっている」ではなく、「教えさせていただく」という心をもってほしい。「教えさせていただく」のは、子どもから「学ばせていただく」ことと、さらには指導の報酬までいただけることだからである。いい加減なことはできない。心をこめて行い、同じ間違いは二度としないというぐらいの責任ある仕事をしなければならない。

(6) 他のせいにしない

自分のいたらなさ、不十分さを他に転化しないこと。運動場が狭いからとか、設備が悪いからとか、これらを言い出したらきりがない。そんなものは良いにこしたことがないが、そのせいで良い仕事ができないのでは決してない。どんなすばらしい仕事でも最初から条件が良いからではなく、その仕事をした人の工夫や努力がみのったからである。狭いからできないという人に限って、広いところへ行かせてもできないものだ。能力がある人は、あらゆる条件をプラスに変えることができる。

(7) 心の体力の大切さ

世間ではよく頭がいいとか悪いとかいわれるが、実は頭ではなく心の体力（根気力、集中力、持続力）がきちんと育っているかいないかのことである。この心の体力は、幼いときから体をしっかり動かすあそびや、五感をいきいきと働かせた活動によって、育てることができる。大切なことは、健康な子どもにすることである。健康な体には力が満ち満ちている。意欲がわいてくる。何事にも一生懸命ぶつかることができる。徹底的に健康な体にすることから、ひとりでにかしこさがうまれてくる。ほんとうに健康な人間は、年令にかかわらず活動的である。精力的に仕事もできる。だから子どもたちにも、ほんとうに健康な体づくりをしなければならない。

そして、体力を大切にするためには、やはり日頃の食物を大切にしなければならない。特に大切なのは朝食である。朝ぎりぎりに起きて朝食に菓子パンと缶コーヒーでは、排便もできない。これでは脳はまともに働かないし、栄養面でも偏り、気力などとうてい湧いてこない。担任教師の体力は、そのクラスの子どもの体力に微妙に伝わる。担任が体力、気力ともに充実していれば、子どももそうなる。「近ごろは子どもの体力が落ちてきて…」という前に、教師自身の体力が落ちていることに気が付かねばならない。教師の体力がないと、子どもの戸外でのダイナミックなあそびも指導できない。それが毎日続くと、当然子ども達の体力は落ちてくる。美しい身体表現は、強い筋骨の発達に

支えられてこそ可能になる。子どもを大切にするために、自分の健康や体力を大切にすること。教育愛はこういうところにこそ、発揮する必要があると思うのである。

将棋の羽生名人は「能力があるとは、その能力を発揮するために、努力をし続けられる能力があることを言う。」と、言われたのを聞いたことがある。まさに心の体力のことである。

(8) 働ける喜びを感謝

人間の欲望には際限がない。よければよいでもっともっと、という心が生じる。私たちは、そんな人間の心をよく知っておくべきである。その上で、どうすれば幸せになれるか、どうすれば豊かな心を持てるかについて、先人の教えに学び、実践しなくてはならない。

人間の際限の無い欲望から解放されるためには、まず感謝の心をしっかり持たねばならない。実際、私たちが今日まで生きてこられたのは、両親をはじめとする多くの方々のおかげによる。生命は勝手に生きてこられたのでは決してないのである。今日、生きて働けることを喜ぶとともに、感謝しなければならない。そしてその心を、今度は新しい生命に向けてほしい。自分の持分だけ働いたらおしまい、というようなさびしい心ではなく、もっと大きな人類史のなかの生命を、生み育てる仕事とでもいうような立場から、教育に取り組んでほしい。まず健康で働ける喜びに、感謝することから始めてほしい。川柳に「損得で生きてる人は損してる」というのがある。目先の計算もほどほどに。

(9) ほんとうの教育愛

「私が先生になったのは子どもが大好きだからです。子どもに愛情を感じます。」と言う教師は少なくない。しかし教師のほんとうの愛情とは、まずすべてに謙虚であることから始まる。とかく親は子どもを預けている先生に対しては気を遣っている。最近ではずけずけ言う親も少なくないが、普通は言いたいことも押さえているのである。そんな裏側も知らないで、自分はこんなにも努力してがんばっているのだからと、知らず知らずのうちにいわゆる「自己中」に陥っている。ほんとうは教えさせてもらっているのだから、こちらから気を使わなければならないのである。

さて、子どもが好きということの具体的事実を、どう表現すればいいのだろうか。例えば、担任する組の教室はきれいに整頓されているだろうか。何もぜいたくなものを使うのではなく、質素でかまわない。質素だが、愛情がこめられていることが大切である。トイレが臭く、教室の角に蜘株の巣やゴミが溜まっていないだろうか。何週間も拭いたことがない箇所はないだろうか。また一方、子どもの名前を、親と同じように呼び捨てにしていないだろうか。もしそうであるなら、教えさせていただいているという気持ちが薄れているのかもしれない。反省の余地があるようである。呼び捨てで指導をしていると、知らず知らずに自分は体を使わず、口先だけで子どもを引き回す傲慢な教育に陥りやすい。そういう指導では子どもの落ち着きがなくなり、荒れてきさえする。注意しなければならない。

このように子どもを愛するということは、決して表に現われるようなことにだけにあるのではない。実に平凡で、日常的な縁の下の仕事の中にこそある。教育とはそういう厳しい仕事でもある。この厳しさを知らないで、「子どもが好きだから」などといっていたら、「何もわかっていない素人先生だ」と笑われかねない。厳しさの中に未来の希望を見出してこそ、子育ての仕事に誇りが持てるのであり、胸を張ることができるのである。

さて最後に、職場は仕事をする場であり、自分自身の人間性を磨く場でもある。苦しくともグチや自己逃避でなく、前向きに積極的に生き生きと働いてこそ、人生の大きな宝も見えてくることを忘れないでほしい。自分がめぐりあった職場は、神聖な人生の道場である。この場を汚してはならない。真実の心で仕事をしてほしい。PTA 活動は仕事ではないけれど、幸せを生み出すボランティア活動として子どもたちのために心から協力してあげてほしい。では本当の教師愛は他にどのようなものがあるだろうか。

① 子どもに対する厳しさと真の愛情“要求は愛”

やさしいだけが愛情でない。厳しいだけでも愛情ではない。必要なときには厳しく要求し、自立を促すことができる教師こそが本当のやさしさをもった教師である。べたべた甘えさせるのみの教育は“やさしさ”ではない。そんな担任のクラスの子どもは、自立も遅れることがある。

② 子どもに言うことを自ら実行する

指導者が耐えられないことを、子どもに強いるような指導をしてはならない。いじめや指導者の傲慢さと見られかねないので、常に自分の体や心を指導者にふ

さわしいものに鍛えておく必要がある。そうしないと子ども達の前で、胸を張った説得力のある指導ができなくなる。

律動（リズム体操）の時、教師は子どもとともに裸足になって自らが動いて指導しよう。ともに裸足になることによって心の一体感も得られ、幼児の体のコンディションも感覚的に理解でき、寒さに対しても必要な処置がとれる。

ランニング時は教師もともに走る。風邪などでない限り、やはり子どもと一緒に半袖になって走り、終わればすぐに長袖を着れば良いのである。逆に着込んで走り、汗をかいてそのままいるとかえって風邪をひくことにもなる。寒くなっても子どもと同じ姿で走る教師に、親の信頼感は増す。

先生が寒がりであると、そのクラスの子どもまで寒がりになってしまう。子どもを指導する前に、自らの姿を鏡に写すことである。なお幼児期の子どもには、夏の暑さに耐えさせるよりも、冬の寒さの中で訓練を積み上げることが大切である。

③　授業中は、子ども達にも教師にも最高に大切な時間である。

この時間に父母とだらだらと立ち話をしたり、教師同士でしゃべり合うようなことは、厳に慎まねばならない。父母とも親しくなるとつい断りにくくなるが、授業を大切にし、クラス全体の子どもの指導や安全に責任をもっている以上、はっきりと断ることがかえって信頼にもつながる。もちろん電話などでも、同じ事である。だらだら長話しをするのでなく、要点をまとめ的確に伝えること。長電話をかけてくる父母には、どこかで教師から長電話している。ここでも「人は鏡」である。

こうして授業時間を大切にして、冬でも一日の内一回は、子どもとともに動き回ってあそびをダイナミックに組織しなくてはならない。この活力がなくなれば幼児の教師とは言えなくなる。模倣期の子どもを指導する幼稚園教育では、体が動くということが教師の生命である。

一般に、幼児の体力が落ちてきている一因は、一緒に体を動かして、あそびの指導ができる教師が少なくなってきたからと言われている。幼稚園では子どもの体力を大切に育てていかなければならない。足腰が育っていないと、美しい側転や蝶の身体表現はできないのである。ぜひ、ともにしっかり動いて、足腰を鍛える活動を期待する。

④　勤務幼稚園の教育を早く身につける。

勤務園の教育ができるということは、指導方法すべてを、逐一園長や先輩から聞いておかなければできないということではない。聞いておくこともちろん大切だが、その園の教育思想や教育観として身につけておくことが大切である。教育というものは方法だけではない。たとえ方法が重要だとしても、まったく同じ指導などできるものではないからである。教育思想や教育観が身についた時に、方法が生きてくる。方法だけを切り離して考えては意味がないのである。たゆまなく研究、研修に励んでほしい。

もし指導に失敗したとすれば幸いである。失敗すれば誰でも反省をする。このことがその失敗を総括して、次の成功に結びつけるからである。失敗が大きければ大きい程、よけいにこだわって研究する意欲につながる。逆に、なんとかうまく行った時の指導の方が、反省もせず、中身を深める事にもつながらない場合が多い。注意しなくてはならない。失敗はそのまま放置して、2度同じ失敗をしたときに本当の失敗になる。失敗しながらも、早く勤務園の教育を身につけることである。

⑤　子ども達のために健康になろう。

健康は天が人に与えられる最高の宝である。健康に勝るものは無いのである。健康でなければどんなにお金や財産があっても、幸せになることはできない。まず健康であることに感謝しよう。そして、その感謝の心を具体的に現わすためにも、日頃より体に気をつけることである。睡眠時間の確保、食べすぎや飲みすぎないこと、栄養のバランスに気をつけること、毎日一定以上の運動量の確保などは、健康維持の上で必要最小限の実践課題である。幼稚園の教師になったらもうプロ。教師一人の健康ではない。あなたの健康には、少なくともクラスの子ども達の発達と成長が大きくのしかかっている。子どもの成長は一日としてとどまることはない。教育指導のある出勤日を、最高に大切にしなければならない。幼稚園では土曜日と日曜日が休業日である。休みには、休養や好きなレクリェーソョン、教養の拡大など、趣味を含めて楽しめば良いのである。しかし仕事が始まったらプロとして、子どもの成長．発達を保障しているという自覚に基づいて健康に留意し、生き生きとした活動的な勤務を心がけなければならない。特に連休明けや月曜日に注意してほし

い。休日の気の弛みから風邪を引いたり、発熱などをする場合が多いからである。出勤の前日はぜひ余裕を残しておき、早く寝てしっかり睡眠をとるなど、明日の指導に備える必要がある。また食生活にも気をつけ、朝食をとらずに出勤して、職員室であわてて缶ジュースに菓子パンをかじるようなことでは体を壊す。

5、プロとはなにか

さて、何事もその道のプロから学ぶことは大切なことである。「いや私は師を持たない」といって、我流でがんばる人も世の中にはいるが、プロにはやはり、その人一代ではない、歴史的に積み上げられた知恵や技能が引き継がれている。それを学ぶか学ばないかは、やはり大きな差になると思われる。教師の道を歩もうとするものは、やはり教育の偉大な先人に学ぶことを常に忘れないようにして、毎日を実践したいと思う。ではプロとはなにであろうか、

(1) プロの3つの条件

① 健康、自己管理能力

野球でも、ボクシングでも、やはり“ほんもの”は健康である。もちろん、いつも病気していたら仕事にはならない。食生活や自己管理能力がまずしっかりしていて、はじめてプロとしての仕事ができるからである。「継続は力なり」を実践できる体がいる。頭だけではプロにはなれない。

② 哲学をもっている

徹底してこだわっているものがある。単なる技能だけではない。仕事に、金もうけのためだけではない何かひかれるものがあって、それに向かって生き方を楽しんでいるようでもある。

③ 何からでも学ぶ

ほんもののプロの目を持っている人は、何からでも学ぶ。自分より年下の人からも、また全然違う仕事の人からも、謙虚に学ぶことができる。向上心も強い。「人皆我が師」なのである。

この３つはプロとしての基本条件である。この上にそれぞれの分野にふさわしい個性が花開き、よりすばらしいプロが生まれるというわけである。

何年続けていてもプロとはいえない人、人生経験は浅くてもプロとしてすばらしい活躍をする人。ほんとうにさまざまである。一度この三つの眼鏡をかけて、あたりを見回してみてほしい。きっと身近にすばらしいプロがいると思う。

(2) 人生のプロ

さて、日本人の働きすぎや過労死が問題になって久しく、労働の時短が叫ばれている。多くの学校が週休二日制なり、確かに労働時間が短くなって余暇が多くなり、豊かな生活ができることは大切なことと思う。人類の進歩とともに実現する目標であろう。しかし余暇が多くなれば、それだけで幸せになれるかといえばそうではない。まさに、プロの体現といわれているような人生があってこそ、幸せといえるのではないだろうか。働きすぎて過労死してはなんにもならないが、仕事が一番楽しいにこしたことはない。なぜなら、いくら余暇が多くなってもやはり余暇であるから、本業の時間より長くない。起きて活動する時間のうち、一番長い本業の時間が楽しいことが最高なのである。

また一方、川柳の「楽が苦になる楽隠居」ではないが、時代が進み余暇が増えてくると、余暇に悩む人も出てくるかもしれない。そういう人はぜひボランティアに励むとよいと思う。きっと幸せをつかむことができると思う。労働は富を、ボランティアは幸せを生む。時代がいくら進んでも、人生のプロは余暇や本業に振り回されるのではなく、本業のプロとして、うまくやっていける人ではないだろうか。

あなたも教師になった限りは、教育活動が基本的に楽しくなるような教師になってほしい。

【参考文献】

(1)ジャンジャック・ルソー（今野　和雄訳）『エミール』岩波書店、1972年

(2)フリードリッヒ・エンゲルス（菅原　仰訳）『自然の弁証法』大月書店、1970年

(3)みどり幼稚園「園だより」、1980年～2006年

(4)甲田　光雄「犯人さがしより戸締りが先でしょう」、有害食品研究会＆「アトピッ子の親たち」編『アトピー・アレルギー読本Ⅰ』、1991年に所収。

（ひらお　たつお　学校法人みどり学園理事長
みどり幼稚園長）